双盤念仏（そうばんねんぶつ）

都指定文化財（無形民俗）

平成３年（1991）３月８日指定

伝承地：延命寺（えんめいじ）　矢口2-26-17

交通アクセス：東急多摩川線矢口渡駅から徒歩７分

実施日：5月24日（盂蘭盆施餓鬼会（うらぼんせがきえ））、7月24日（地蔵祭り）、10月24日（十夜（じゅうや）法要）　他

（令和2年11月8日撮影）

延命寺双盤念仏　記録映像

令和2年度撮影

（youtubeに接続します）

双盤念仏は、平安時代に唐（とう）からもたらされた引声（いんぜい）念仏の流れをくむ仏教行事が大衆化したもので、太鼓と鉦（かね）を奏でながら独特の節（ふし）で念仏を唱える慣習です。元々は浄土宗（じょうどしゅう）の僧侶が一人で音程の異なる２枚の鉦を叩いていたことから、名前に「双」がつきました。江戸時代には宗派を超えて庶民に広く流行し、各地で演奏団体として「双盤講」が結成され、娯楽的な要素も含みながら演奏技術や唱（とな）え声を競い合っていました。最盛期は明治時代で、その範囲は関東地方一円に及び、特に閻魔（えんま）、観音（かんのん）、地蔵（じぞう）などへの民間信仰が元々根付いていた地域に浸透し、それぞれの縁日（えんにち）に演奏が行われました。

大田区矢口に所在する延命寺も地蔵信仰と深い関わりのある寺院で、その由縁で双盤念仏が始まったと考えられますが、戦災を被ったこともあり史料が残っておらず詳しいことはわかりません。現在受け継がれている叩き方は、明治時代に九品仏浄真寺（くほんぶつじょうしんじ）（世田谷区）の名人から教わった「奥沢（おくさわ）流」と呼ばれる流派で、太鼓（ウマ）１名と鉦４名で構成されます。戦時中の金属供出で鉦を失うなどして多くの双盤講が戦後までに廃絶する中、延命寺双盤講は努力と工夫により苦難を乗り越えてきました。特に、男性のみで講を組織することが一般的であった中、後継者確保のため女性の参入を勧（すす）めたことや、口承（こうしょう）を原則としていたところに譜面や録音テープを導入したことは、今日（こんにち）まで存続してきた背景を考える上で重要な決断であったと言えます。平成30年（2018）には双盤講保存会も結成され、23区で唯一東京都の文化財指定を受けた団体を地域全体で守っていこうという体制が築かれています。今後は子ども向けの体験講座を開催していくなど、より幅広い活動が期待されます。